

巻下

俳風

柳多留

四編

9
1147
45



明 9
部 1147
卷 45



江ノ川
 流るる江ノ川の
 水は清く流るる
 公好むくまは
 いはれをさか
 こそせしめて
 りしその句に
 ちひさかたの

巻下

ハツの俵をふらぬ早六ツの翁とあて
 生を我れふ柳の糸口をさひせ
 ぬまきやうに 若ふ裏忍入て
 守し妻の婦

文化五辰仲夏

川柳風吉例角力會

上ノ部

川柳風
 文日堂評

所感を表乃穀を秋志くば 竹子
 蔓をのをよひびく松や菊を極 本賀
 夢の夢に小松れよがゆるこ 竹子
 六十人よら梅も背なり 牛賀
 安士鏡波虹天秤よりあち 吞施
 我が朝を木のころは兵衛魚の旅 竹子

上ノ部

貝売が鳴くと道風少くもほけ
 産の幕 陽キ口上と 煙なり
 浮草のふよ波るれ 都も
 川のそも 盧中が 魚は 足代
 園丸う 踏をのりして 又さるよ
 帷子とともく 小虫乃 ちええ
 新自ヶ谷 帰りの せげは 海ワ
 龍丸の 勢ひ 月も の 歌キ 及

志丸
 二蝶
 舌能
 竹子
 森馬
 牛賀
 怪廣
 森馬

中ノ部

父母兄成二節の系です 子孝
 残令に 母の の おいれ たり 後
 竹と び子 年よ 田螺乃 声なり
 高人の 二人 まどろ ぬか 船
 拙牙で 風を つか ち 笑ふ 悟氣
 八丁の 室は お丁 ごと 何門 じ 毎里
 嫁乃 何し 子 鬼灯 の 首を ぬぐ
 おがさ 按摩 音羽 の 湯を 淨

吞能
 森馬
 千鳥
 豆人
 森馬
 折木
 集馬
 志丸

中ノ部

下

中ノ部

下姑のししおとく日待れ禮ごとく
里のの飯食のこぼくを敷物
古後り乃宿女も果れ石也あり
姉さんと坊が長るとありか
まろつゆのふんの赤後をめぐけし
西妻のどんざいの國までし知れ
仲人とのあぢの玉さざびと
宿までくまを仲人のつま

散売
本賀
里花
全
竹子
茶洗
竹子
留人

同

物人の山をえり目々ちぬれ
精気の雲城草小源之位
産籠の返棹のふひ者あり
さいお川をさめ女房のこゝれを
三節まで只一節小世帯ごとく
そのあんの煮うまへん破かぢり
嫁入を馬げけよまら村の暖
産がしらおこり一合村の好家

ト夕
全
柳雨
牛賀
志丸
全
梅里
千之

源

宿

前ノ部

東川と西川はほど出しておれ
東の糸を賣り町を尻をとり
六月のあぢいはむなを孫ぎるゆ哉
お門と糸ぢん吸筒をうけそび
産生のまぬぐふをせうけて
深林の知れぬ竹の子を登こ
猫の目を付斗にまふ村師通
切落し理居もせりも根元

里松 香籠 竹子 竹二 牛賀 休子 全 燕子

同

涉賣とさし賣まの遠ひの
星の車海のおまにやの
赤腕をいしむをふお伸をさ
むごり子姫とよしの糸入すて
北國の鳳凰えとららんびの子
ほれとま仙上子ふもきて
百きり死せしておついで
まんはがと九日毎日の指をい

和里 柳雨 里也 和里 全 集馬 休子 水守

巻下

煎ノ部

乳よりきく牛と山吹とどらふ
 梅よりきくのもえのれりうら
 うのむしや修ら他ものこ番更
 運のつぬ牡丹餅でたつかれお
 には斗標の産をぬぬけちを舞戸
 医兵乃名がはくとお子も安んま
 下女難家結仕くまを登がふひ
 およ如とおもぐら産臺(ぬり出)

梅里
 和里
 猿山
 牛賀
 豆人
 芥子
 柳雨
 豆人

豆人

留人
 猿山
 豆人
 本賀
 里花
 本賀
 美徳
 若蝶

以上

二會目

川神風
文日堂評

ほろひ雪ニえの石も首ッ引キ
松下よりち本乃下がすらぬい
六人のうで琵琶を中強
春も花をは実のなる葉を履
押も乃指のよこ天の川
舟出テ糸舟とまテのお話
春風のぬき大キを仕るん

ト夕
蛙声
谷水
丸籠
折幸
竹子
志丸

こつまこでニッ一ツのゆりれぬ
詩学よと来れが音までぶつ
豊後の虫紅葉の中で鳴キ
こくお知れ門中ぬまかを
まゝとて世に乱れちるといふの
てうほろをかおとるの目の足
切りて見れば名書存号
孝と義を末世にのこす蝶の
あつたうとせよせをさる蛙や娘

森鳥
竹子
串竹
里松
煙草
竹子
志丸
友牛
蛙色

巻下

まきのまきと仮うて夏のまきとまきし
八重がゆら麻のまきのまきの上(ちり)
いちどおまきとまきとまきとまきとまきと
いちどおまきとまきとまきとまきとまきと
千金のまきとまきとまきとまきとまきと切
一寸のまきとまきとまきとまきとまきと
おまきとまきとまきとまきとまきとまきと
付にまきとまきとまきとまきとまきとまきと
まきとまきとまきとまきとまきとまきと

森鳥
竹子
二蝶
梅里
丸蝶
柳糸
竹子
全
柳雨

まき

雨風とまきとまきとまきとまきとまきと
まきとまきとまきとまきとまきとまきと
まきとまきとまきとまきとまきとまきと
まきとまきとまきとまきとまきとまきと
まきとまきとまきとまきとまきとまきと
まきとまきとまきとまきとまきとまきと
まきとまきとまきとまきとまきとまきと
まきとまきとまきとまきとまきとまきと
まきとまきとまきとまきとまきとまきと
まきとまきとまきとまきとまきとまきと

まき
ト夕
柳雨
二蝶
計人
まき人
二蝶
猿山
友中

よし東の方へ柳の葉をたぎり
 こんどる歌北の繪巻を寄り
 どぬいとて川がう巻でたを
 おが桃の坊をよされる河のい
 女のまひひとぬ海老やのい職
 ぶざれに松首をわりのせり
 文字ぶどういいでざんまを
 づれおちふたと浮るちとほ
 あひひもめんもの角に赤
 和里 谷水 志丸 折石 志丸 全 賤丸 集る

巻下

虫筆でぬ瓜のよめが鳴きて
 おく後の大清く種なくが
 け里へ流れてもあさるの
 和しひ身一途のきれいの
 ねのまややくの寝た内
 折るもめでねるよきま
 河が縁乃はは道りか
 町人も能く振む山が
 天徳寺のうめく
 花蝶 柳雨 橋山 全 丸流 燕子 豆人 橋山

心ざりてはさきとわりの途られども
 あしどんでまゝ赤き神を賣りて
 花の宵下女をよみてよりのさうけ
 居福志のつゝ天物と氣を擲て
 夕立にぬんぞりのかゝる瓜の如
 目眩にまろりゝまゝやに下女小え
 ちつどりのむらとかに花の
 持系令鬼のぬんぞりせぬなり
 前ふれと肩をよみて下女の髪

猿山
 志丸
 敬売
 眉長
 柳雨
 善徳
 敬売
 都柳
 和里

股川ぞ膝をほく蚊があむれぬ
 さがやのまゝとていぶかりゝ
 糸面と表毎内かゝる女房の
 す紀なる下女竹光とのかりひの
 糸性いさげを令性とくは縋
 伯父坊の流し目でるはひ髪
 けちるや川世に又のりて小糸
 閑懐をくらから湯番おびてる
 等ひあしとわりの新造

牛賀
 岩水
 夜光
 燈色
 集馬
 若丸
 里如
 全
 竹子

下
 下

三會目

川柳風
文日堂評

夜花中を車よのせく所上説
道の實ッ付よあまぎる市街念
才が大方さや城まうりて清きま
源トち名取ラまでも上飛あり
耳の穴すに継いで不日月勢
手乃印で巴を流ひ妙を事
魚舟のちひ綱と釣るもまあり

都柳 森鳥 喜丈 吹唐 和里 春約 二蝶

二三を以傳ふトるを困子多
音音がさると傍正うあり出
お蝶お花をら更にもる困家老
知いとまゝあゝ波まがが海を
繪の女士もえとと現の海のち
何か喰ひますんと四馬うり下り
救でんか筒音のさるおごやうと
み笑にわニタ笑うぬ不動の目
笑ふくまきやとすれ福の糸

春約 若蝶 普売 花夕 俣成 春約 和里 都柳 牛賀

巻下

あやしくを串がよまらるるの
終せしとちりて和島もろを割り
秋の香文て衣裾は清くあり
まのやといはくのでいあゝの
客接とけざし女舟の秘書はて
うく結ばつてくつて好家の髪
くももよみ方仕入し呉服店
灯籠が清くく像りさるる
あやしくを串がよまらるるの

蛙声
里抱
森島
売文
舟駕
柳平
春駒
森島
城邑

女松やう今春の月乃さるる
まの同くは何し十里まの
月二つ息子とやしがやまあり
笛を教ふもどくまのふを
あやしくを串がよまらるるの
あやしくを串がよまらるるの
あやしくを串がよまらるるの
あやしくを串がよまらるるの
あやしくを串がよまらるるの
あやしくを串がよまらるるの
あやしくを串がよまらるるの

豆人
二蝶
牛賀
久賀
全
久世
拔唐
和里
豆人

豆人

散売
 蟻夢
 美徳
 吞能
 老弱
 久世成
 牛賀
 蟻色
 猿山

きのんがゆきさーて二子山
 居い女房のくせきよくきんく
 十二三お志申く夏にさなが吹キ
 それ見さうお志申ぐさうの鼻が房
 何れう知いんもたれたれさきん
 小狸と下舟をたてよおつじらげ
 川城とまじんお志申ぐさうの鼻が房
 ぶんきよしそちらげら目る笑本
 え、本にまじらさうらさう根近入

低成
 吹唐
 舟賀
 扇橋
 猿山
 舟賀
 全
 豆人
 牛賀

四會目

川柳風
文日堂評

夜乃雨更うのそらが琵琶へ落^ち

散売

名の室ついで冬はまよぬれぬ養

久賀

え縁又遠き子花と朽ぬえ

九龍

非乐坂よよ若戸の面ふ

蛙声

あそふと森也江戸の新浅社

扇橋

は佐のそと之位又侍の奇の徳

花夕

せ川さたぐぬの切ぬてたま職

里道

おまとお馬の内裏ゆやして

蟻色

舞^りと下総公の才花あり

春駒

山菜むしの泣めう茶権る茶

森鳥

八景を六つまたむ屏風の繪

虎人

関白城る呂利くと口車

里松

吹よりも八丁多ひ江戸の町

柳本

きまやをめて師の坊妻戸ごまれ

お蝶

地之恩をよと一葉の何鳥

伝書

おまに纏くくせる真極寺

牛賀

巻下

どけいりたあきるとか房けらり
赤いしちくをせ緒い初月で喰ひ
孔ゆきふ二三母せかしし
夕立くすめくさ歌の石地花
六波羅れ佛で咲詠し尼が出来
二月のまけたり必し持あ身
八羽のちりんもあけぬあまを
そふで運子の内さがし出し
せに歌の口舌七海糸をよみ

和里
二蝶
吹唐
織好
花夕
散壳
丸丸
梅里
友牛

よをかりとくはををさるふあが美
係次糸が娘定出しかうを中
百人りりまのゆいしに川あり
釣比ふあをぶらう鑑よ酔さふあ
むすぶらう解さう風の川柳
白くあり赤くある歌の紙し
りおきつあらの悪かありある下
出這入よ口舌しちをさる纏簾
細柳の葉乃よさうし甲斐止之伝

好女
賤丸
和里
猿山
千鳥
二蝶
和里
夏人
都柳

巻下

幕の口上敷屋一むぐらふ
 打ち浴⁺やくらふの蓋をあひらき
 海舟死の⁺死の地の敷屋は清き表
 丸のきひの化むと洗つて
 けちを縁陣竹は猫をどせて居る
 ちんちん⁺ちんちん⁺ちんちん⁺ちんちん⁺
 去の⁺とらとらとらとら⁺の里あま
 草を天と虎と光陰をうま⁺福
 甲九の⁺ぬる⁺巻を⁺履ろり⁺喰ひ
 和里

後家を抱⁺抱きと⁺おぢ⁺が⁺ぬ⁺葉を
 新世帯⁺今日⁺休⁺か⁺の⁺申
 羽風の⁺味⁺までも⁺知⁺中⁺細⁺と
 コウ⁺息⁺ふ⁺う⁺あ⁺う⁺て⁺いま⁺コウ⁺
 ぢむ⁺ひ⁺ひ⁺で⁺葉⁺と⁺ぬ⁺新⁺帯⁺
 ち⁺よ⁺の⁺袋⁺を⁺脇⁺が⁺結⁺メ⁺あり
 身と⁺鶴⁺が⁺は⁺れ⁺て⁺の⁺池⁺の⁺ま⁺
 帳⁺よ⁺の⁺か⁺う⁺さ⁺せ⁺ふ⁺十⁺三⁺夜
 弁⁺天⁺の⁺岩⁺を⁺ぢ⁺り⁺く⁺ま⁺る⁺所
 青柳
 敷売
 和里
 扇橋
 串竹
 梅里
 残丸
 久世成
 和里
 越色
 里托
 荻売
 猿山
 牛質
 全
 二蝶
 千鳥
 吹唐

巻
 一

初日
十五
巻

幕の口上敷座一むぐらうふ
村夕湯チヤウの蓋をあひらぐ
あけ死のりぐの寝屋は清き裏
乳のまひと化物とを洗つて
けちを徳陣竹は猫をどせて居る
ちんまゆのぬくまぐらうまき
去月とらそとくへの里あま
草を天と虎と光陰をうま徳
四十九の踊る巻を庵ろり喰ひ

青柳 敬売 和里 扇指 梅里 久世成 里松 猿山 牛賀 全 二蝶 千巻 吹唐

後家を抱き坊主をおぢりぬ茶屋
新世帯一今日休みの一申
羽風の味チヤウでも知る中納言
コウ息子うんちあつていまコウ
ぢむさひひで茶をとれる新茶
おのこの袋を膝が徳メあり
身と鶴がはれ立ての池のまき
帳よをのめりさせふ十三夜
弁天の岩をぶらりくまら所

蜻色 里松 猿山 牛賀 全 二蝶 千巻 吹唐

五會目

買色一題

川柳風

文日堂評

おき海のし麻(風)風来イ羨とら
 回毎不ど身仕舞那やに照子後
 山下詠をゆき傘をりてくる
 竹埦を不たらよ案る舞をかけ
 三そのと雨より水が河りが
 るる舞んよは口のちかうもさる
 風風よなるのい里れ小舞もる
 菅裏
 玉章
 系二
 竹子
 和里
 系二
 森鳥

海のみとサガおよそし十六
 うまにちとらつるれど金
 みどりかう一うんよのれち又
 舞りはまざおるの方といふ
 筆も下詠し三浦屋をてあ
 け心とをを根そつ切り買ふ
 玉の菊とくぬやあかしく名
 ぬきや詠ぞとらる日中
 萩梅乃詠よ七まを八重に
 是赤
 柗の
 羽江
 集馬
 森鳥
 羨徳
 玉章
 貞徳
 是赤

新造の船と屏風が浦へ漕き
 居候が事がつつきんと虎と
 むきやのちん家布の月を世
 かむくまぐの月をえらぶと
 まえお買へいられごとと
 ぬりやでさぐりときめて新造
 細えの月貫き一佛一社あり
 くちぶらぶらあひなかりの
 新造にむくぬの根成おされ

森鳥 九龍 梅香 森鳥 里松 マイタ 丸龍 有幸 森鳥

山よりも橋と東と島と
 ちりぐり海にわたるのて垢のちい紋日
 字くぐりざんをと香めれを入
 燈籠をえよりし風をえらぶ
 まくち首よりぬい里のちんや
 八月二日より東のちんや
 八節のちん解を八月月に
 何ものちんが咲んをと
 ちんやと花のちんや

辰夕 横好 巾布 美徳 竹子 二蝶 菱裏 マイタ 本質

居濱らりめで下りあはれしる
 細見のすゑ新造川つり
 ちりきりと切て門前拂ひ
 吉束(り)と拵けいあるあり
 細えをえてこりだと女房
 ぬり結ぐ売のつらむ花の
 家と淋しひうあてごり
 上あてと台をからんでさる
 身とどうもされる乳で居る三今日

志々
 夏徳
 和慶
 候成
 柳下
 玉章
 吉原
 水恭
 正徳

子川とでぎんもウシ
 新造のちり山屋の平うつけ
 思は事もねですまふも
 あじと換小粒をゆきに
 かりてあはれ乳でい
 番頭と子より
 ちんざうとさ
 寅又あはれぬあはれぬ
 臥糸ぶアかえらふと素又乳の

若文
 玉章
 柳下
 雨江
 吹磨
 マイタ
 志丸
 有果
 蛙色

古子で逢ひ今に何をうけむむぎ
 居あけらの名えんを和又仲乃町
 おつんを山をえりあそびをま
 安ひあらいあそびと提灯屋
 文日、うや、せひ、格子まで
 ぶつさとあらの胸にうらかり
 いそぐやうでも返れをぬむころれ
 ちる、顔よりれあ鼻に終るれ
 半、新、むむあ葉、目、が、上、も、あり

榊亭
 修成
 又不
 マイタ
 木賀
 多魚
 留人
 志丸
 横好

あり紙の迷むと解くまき路の
 縁引とぬあうで筆のをもとに
 新造をまき路をうけいざりけり
 出してあやアイ、と売買ひより
 心や酒乃肴に売志のうまき
 吉原をうけくも同ト、然であり
 山、東、新、造、も、せ、う、か、ま、し、熱、は、也、
 たいせい、鼻をあうせう、う、う、の、月
 ころ、う、新、造、ま、ま、ひ、が、ま、あ、り

蟠色
 里在
 散売
 雨江
 折石
 竹子
 散売
 和慶
 吹唐

和里
 魚角
 燈色
 九龍
 シクト
 玉章
 敬亮
 森島
 志丸
 此の... 燈... 魚... 九... シク... 玉... 敬... 森... 志...

苗人
 集馬
 マイタ
 柴馬
 アイタ
 和茶
 青島
 志夕
 志丸
 ... 苗... 集... マイ... 柴... アイ... 和... 青... 志... 志...

裾つゝが切しゝ仕替るゝのやぐ
 今更すす紀お音の出る撞木河
 幸路りちごれもできほく大か
 女と蓋又仕ゝ飛てつと云あや
 免もたぬ海麻を二條に買うる
 さつくとと屋のあやつと輕井は
 つかうにたつゝさせて海屋へ
 口鼻を傷が園でかげぬとりま
 声とあひびぐそれのをとやるく

横山
 志丸
 横好
 竹子
 吾平
 志夕
 葛丈
 豆人
 散光

お入りの一袋と新造おほほむ
 たびりのいめんあつゝは下さる
 おちよお若とあお茶のかぢまら
 けつあいの紙職を穿あつゝのこさ
 原まら竹光けつゝいんまじし
 鉄炮で武百まきあつゝニッどぬ
 尻をむつゝと免きりぬ一尻を穿り
 うゝ糸へ尻を穿りよけまのいす
 賣りおと毛がさむはてう洗い

横好
 集馬
 丸就
 玉章
 メ子
 吹唐
 巾布
 品徳
 吹唐

六會目

化物一題

川柳風

文日堂評

繁昌さ化りのありとまよふ遊け
 木賀
 化やがと大入及が上二座なり
 吹唐
 むけおの親玉一舟の白ひ接
 卜雀
 去悔と化ては天一葉はくあら
 串竹
 お挺がゆあると宗近ぞつとまら
 志丸
 猫まこの踊少少よやとやあま
 集馬
 化りの法もまよひ物あり
 森鳥

化りのでソのち月ごらに香る女
 吹唐
 ろく海首志のびが下で咽とつた
 芋洗
 ろくぞつとまら 化おんときま
 志夕
 エッ目録よせと入道少くはけ
 今
 海くよまけくまくくをる狸け
 辻本
 小ま下さふぬ子花よつけられる
 豆人
 けさづけよあけて地花の名はほ
 和恭
 何よしうけうち茶釜と大さき花
 都柳
 もろくまの化おうぬがうぬをまら
 青波

遊西もよみ持婦ささなる折柳
 以陽を疾く化くも時よ月が替り
 版はどみえぼでニタまこ踊え
 又こ共とあひがんだれ時を
 吾隠し出さる毎虫寂入后
 酔えよ河童の血乃ちまとのこ
 幽冥を所抱えよ根津の番
 九十筋次くう変化成ごとく
 夢うらが化多妙地とある里ひも

雨折 志丸 雨江 針人 千雀 執重 可笑 玉章 散売

猫と遊ひながらと挿かき入る
 番町の古井戸で噂ふ焼餅屋
 垢あえの歯牙をまじつて茶の香
 茶湯とえん半一保冬ハ化かぬ
 藤一病んでまじりまじりく路首
 伯毎とりお二字だけおゆむ縁
 化りのくますまへ乃みす針
 狸と猫と化りのく藤去あり
 播列でぢいをうたと松と化す

卜文 和慶 集馬 如雀 佟成 谷水 青露 一文 串竹

五友
 菱裏
 芋洗
 栞里
 五友
 賤丸
 竹子
 志夕
 森鳥
 張よ耳はさく度流に化て出る
 六位のをゆく地中人を化はる
 沈物の列ッふして置くに化はる
 ぬぐひをかきつて猫と遊ばる
 七丁の町よ化りの他で居る
 南坐と山かたに化て海へ出る
 年およもる化物よのついで
 笑ふい友女ととどが化て仕舞
 人よとあつち天う下乃化りの

マイ友
 玉章
 有幸
 菱裏
 志夕
 芋洗
 綾丸
 眉長
 青柳
 一徳の猫と小判を嬉しがる
 寄方のおんまをく鷹の餅食
 千両が化りの以てお紀伊屋
 こゆきれと捨てて化て出る
 持てゆく河童と思ふおぬのお
 横よまをく狸を化してぬる物
 今年らの着よ化物とあきれる
 桶乃化物津はれに受てけり
 堀の内乃よ化りのあきんぶる

ハッ下り思ひ化お目アヤワヤ
よ系於や〜増屋と化て能神の
鬼門うらうらんど化お息子思ひ
番笏の小指あちまらお具と化
よぬひのそかくあくなるを意味
ワ男物金よ化くあがる之
ワヤの皮よ何とて化ケの皮
美しく化るをりけて化粧の同
後庭でぬちの免さぬる化ケ嵐

志丸
集馬
芋洗
雪平
谷水
玉章
久世成
箕山
芋洗

源一陽が珍紙の海を武家と化
ま赤よ化て四角巻勝が園をこく
ぼくぬり吉のよと思ひ敷と化る
化りのよりいする麻者が赤よひ之
折り合ぬと化る正一位
光陰乃化その嫁が娘あり
もうの化りの女嫁娘と化る
清玄のうんぐ〜娘よは深まひ
化るとあり〜医者あ上せう浅まう

竹子
花夕
都柳
青柳
志丸
森鳥
一吏
一陶
梅里

神農を化おとすむがちの
正史の附系念とむけ仲写
た次々集まに国をとりて猿と化
納豆うり飯燻と候とおい化ケ
化りのを緋屋ありくま十化
田舎者かよひで化お志よきき
け焼く目たるものまじりけや
火のしよき七とつ小登るの子
下女うられ下女化おはまら

純樂
猿山
醉臥
竹子
豆人
森鳥
青虎
柗雨
和茶

化おをききんて撮人令りや事
あはれさねとや川八月目に化て若
中庭と化おをちねふ二十軒
祝むじか船治屋やると子成り
下女うられ下女化おはまらり
内中が化おをよきねいふ勝子
化およる登とそ方町好ぬく中
下村でお前く化るけちる所
天狗の甲下ハ急を突りかどく

谷水
織好
可笑
豆人
里松
青波
如雀
杯舟
柗雨

きんぎょの舎あつこひと狸をひ
おろふの化也かぢやうえふえせ
せうのよ下女とにわの足は化け
馬ほごを屋のふは化る牛の角
毛のぬけこゑもまぢうは化て物
ゆんごうが政中と化る柳のう
いづれ智まぐそとちて新婦り
おれ保名は賢慮させるあま
化あはくまづはるお語り

扇橋 若吏 寸尺 苗人 芽洗 全 竹子 雪平 竹子

七會目

川柳風

文日堂評

箱りののしりま婦桃乃花を約
せりるしりまをふおまの河の難
れいのふあま系糸粉信去まあ
釜の中ねがうのねごとれ
まがしきこと仲国を馬を下り
そのうちをむおまのこころ
おのしりまの白くを二のあま

魚川 賤丸 丸龍 古竹 和里 森鳥 烏友

浅今をたふは深院の本影寺
すゆき云へまをかぎるを影時多
に海波をびりたるに又法
音をんた 庵ませり一ツ滴
似疎のうや積このやるは車
ぬ昔後多と指と波の中に又
風車浅美の政申あゆむ虫
雲法と火法へ息をくらげふふ
まのしよと九州を押し肩の先

九折 牛賀 登蝶 一松 助乐 和里 久世成 散壳 烏向

手お月と村おら村へ入る者り
神の巾衣のうら息をきかうんせ
今あふはほぶくと十日
浅美の門番は夏とひしが一ひ
おほ屋敷へ天物の巢をつじし
まの人の骨をかぬけてた地やい
合ぬ箱ぶかりうらなぬ体も
なやうましく片と地の箱を抱き
あすあまめくがうらぬ飯を喰ひ

志夕 九折 里托 扇指 和里 下手也 吹唐 散壳 梁主

いざよひと申すを川にぬれ
羊のぬれも丸山のぬれも
搦のたぬれあり搦はうとぬれ
十代の太刀七代でまげるあり
鬼乃くまくらんせり人でも
呂備志の小ぢうとゆで搦
切着しきまひに月ぬれつけ
漸くおのふと長まいはのぬれ
厚がぬれと瘡のぬれ

久世成
志夕
森鳥
猿山
猿子
志夕
志賀
梁主
煙幸

一朝のいかり搦紳まろげ
内、穢まろけて下産を仕さぬ
あつこくまろくと下女むろげ
かのくで下女がしういぐんとぬ
もつがゆ牛でもぬれをぬれ
はらり〜かりんぬれにまむいぬ
ぬれぬれのぬれぬれぬれぬれ
抱けて根をぬれと押のむぬれ

里拵
燕子
豆人
助来
志夕
黄亮
賤丸
若蝶
登蝶

八會目

川柳風
文日堂評

長老の万焼をのまると小春之
 浪乃とあげぶをまるとを謝
 琴のまれば通ふ度回で落の端
 底の同れあ士の揺地にな毒汁
 七折紙ほどく濁せる 沔まのり
 からあちのまばまでけい梅の花
 高仰の文もともれは葉のあ

木賀
 鳥友
 和恭
 志夕
 猿子
 久世成
 一松

一酒を呑ば一詩を吐くと李の白
 の女所あ士のまの根のちをえり
 耳の根くむとんまふまふと通り
 居もゆるも丸くあふ松が長
 繪のまふは庵へう治の雲花び
 似やと陰本よと松と泉岳寺
 波の春中妖の笑ひの本潤子
 あま飯どくまのえと海老で鯛
 天よまをう地よまをうの江戸の麦

森鳥
 芋洗
 全
 里松
 芋洗
 二蝶
 里松
 辻木
 和里

風凰とえとと同一ば猿馬
鏡候えれば粉のうけ化粧
幸村も消へとあくる妻所陣
休るよあけいまきのふきの杖
腹のつらんびこらふまきく
らうらうき二挺やうきさう
思ひまきか冨かあまけのくまざれ
淡茅の名代むらさねてとあえ
森不うう鉄ををらふ病こより

蛙色 猿山 梁主 一松 木賀 柳雨 里雀 天作 猿子

くあらの中にまきく杖と親
押合く月白の紫巻でんまき
丸山のさくらだちやめるあど紙吹
ぞうとも志いさうであが出あや
キの字屋の巻せよ丸あさうり
墨場所の何東ラヤくむかししい
かきけのよふりる先やまをさげ
あましくあお漆あま枯へりくまき
大いんさきと漆屋のかまきん

散売 豆人 志夕 卜夕 散売 森鳥 賤丸 散売 木賀

瀬戸助とみ舟八景のし仲間
 ひとぞおしとあしとくおせ
 秋ウツの志先がけと天の川
 運とと天よありがさ候は惚られ
 飯のせ流しと仲間とつとあり
 又川とといびの月が天りの日
 お種をもみんと松がギツチギチ
 切んづるの殺さお妻やとらるぐ
 子息に下すちり候下候我をま

蛙色 煙幸 俣成 二蝶 眉長 一陶 二蝶 雪平 其尾

安々ふせと清植のうまほせし
 山伏とといふを天を及吐とて
 帆抱がえつとびぬまよはさ
 穴⁺とて隠居のたのこ徳をさ
 ぬのもで孝源帯ハ所 振り
 とくおちびぬ娘を潤布志免
 むらあ翠⁺おのはらむとえておや
 ころあアマアねでちちと下すをひ
 光陰の矢の根を松ふらやぬ

和恭 吹唐 眉長 芋洗 猿子 紀乐 賤丸 舟駕 眉長

九會十會打込満會両評

文日堂評

芥煤竹海ぐるふ奉とつをられ
 千奉を毎と一奉一軌どら生
 く丸も菅家も人乃目とあを
 所見樹の梅も自在に死あは
 り海こゝにひひ友とえて津海と
 まの白と紫一十友はまな紫
 蟹島とす丸と二友の月中り
 木賀 森鳥 竹子 吹唐 丸龍 煙草

異口同音よ紅かむむ花の音
 鬼龍我娘と妻との中よ又く
 陸路とも柴舟よるくは通ひ
 丸揚乃勝とくば山奉つよ
 十記日門のふんえもく殺少路
 あさむひく讀む昔れ海お端
 てるたも人ぐぬまかふ市二日
 松でい志の死松風で脚ケられ
 まがさい退子のかゝるぬけ糸り
 散売 琴我 木賀 丸龍 森鳥 豆人 今 玉章 久賀

勝りこの袴をみるが観式
其の九年の旅のよき首と
ふあのみ一箱のあつて出来
尻の火城を多く胸をぬきし
松風とくらめて司馬鬻り
かつちぎれと組むと佛在世
迷ひ子の塚をたぐるに古歌あり
去り後へ狸のあつてさつて天気が
春の風を免をのあ根へ川がうり

九龍
全
散売
全
里抱
和恭
竹子
之世成
豆人

風風も大門までらつて来
萩の牧を遊ひちんちん十は
蝶々のほとをさるるど吸てはし
其の年の笑ひ初を嫌をひ
おもてささるる庵のよき草を妻
津巻の場と女房と帯とあ
川魚よ海うらと忘せるさひひ
祥月どおやをよと揚るさひひ
腹のまつよりよはさつて戸を走り

串竹
梅里
酒好
鳥友
木賀
黄峯
森鳥
虫声
九龍

たふ紙もと出しよある花の里
ま4がう天久とらんあひあ
十三日捕まうこるど志中れ
えせで虫トくはまのうまこほ
あひこ一声おゆでも小らぐても
くどあれた娘紋よりう紙かあ
むごるあ糸ほ世のあまよこもて
ちんがうのう嫁やうんあひて
春代がうあや又あこと十五白

鳥向
舟駕
里柱
里雀
木賀
散売
辻木
竹子
若蝶

ゆきいと皆信名であつたれ
うり斗とらに坐席は十れくら
石川へふるあかあかのさうさ
まをれを解りまよかて幾とあて
古井戸へあれあゆまひ事
赤笹ののへ人更海と横に遠ひ
矢陣の山灰上よに絶んで完一ッ
あひのうけういと銀塚づりとのう
よとあつてあまよとくく下者

茶口
里柱
銀杏
ト夕
谷水
登蝶
谷水
ト夕

おそあんとしつむむ法ははてやれ
拍ふよろこばとをやめらんこ切
そとたりの引きし幕津まよ
人のあめあまは海にそゆきより
おひはどくろくと井戸根をまたれ
かろうさの尻んそやのよふはぬり
ぬるふん幸のあまをたぐひ
後炮と命を的りしちんひ
よし町の定と湯ゆめけてる

豆人
全
舟駕
酒好
竹子
杉丁
谷水
猿山
斜巻

湯た境がゆふあけ今日休
がぜん夏溜りさると小町
井戸根があ根よのこすは小橋
芳町でたびさしこ尻があ
やりしう小松やたをゆも耐と境
庫裏をアアエトハ武儀も滑ごや
子侍より牛侍をもちもはは
あ割ははくちん下女がう代
下女出合紙と上田う浅茶

和里
義徳
久世成
素連
猿山
散売
和恭
木賀
舟駕

その有りたるんれは、
おぬい毛も川をぞ射みぐま
糸糸堂福れは、
毛を引けてづつと押込むか
けお糸もあつち大キな草むらひ

蛙色
里托
和恭
一陶
丸龍

川柳評

はか乃るるを早きとて、
小国あれど日チ早人の津藤
まのちをまぶらるる

砾川
森島
砾川

花の此風は、
蝶々ののほとまほほど吸てさし
け糸も殿あむ八幡と川を
門松とまより年の積るふ
小ねでちのりは、
遠ひ子の塚をまもるに古
赤をけいかにぬゆ肥満と
赤とひまぶがとこしら
すこやうにほ飯をまねと

辻木
酒好
竹子
猿子
砾川
竹子
砾川
和里
砾川

天草でりの働紀の甲斐くし
川魚は海うらまざる事
を伊達よせぬのでりく名がほ
せんく小娘も力の男ごうらん
けいびと父もろうらむ母の泣ひ
をえおらのげりて神唱と旅
羽織うまぬ鳥雀門どくすき
比甲と青樓今日と度女宰
よりののり母をすし珠粒をゆし

和恭
藤鳥
賤丸
志夕
枝成
砾川
玉章
孫川
梁主

水家老法より平内を渡あり
銭持者去る眼の眉さとなり
緋屋とく阿まひてとこのまじく
大森く海苔のあらあを柱てを
晦日のももるのうら申の月さうら
裸肌成女りいんせぬり男
まが紀すてそ源系内と編者
源を渡り戸塚の墓で家つぼし
あまよ小とちんとく今と山

牛賀
串竹
リコウ
串作
舟駕
玉章
雪平
玉章
蛙色

思智と女房ありつり
因ふ屋と初まの屋よりり
細帯の赤田を解て茶白山
風喧嘩かゝるささつり
ささぎ川つりやとり云ぬ茶や娘
景清と尻りちには肩つ人のめり
されども純文はとらふ深乃也
之ゆえとさあつりてあぬし
前九年白旗のよふは首をとり

孫川 竹子 全 孫川 竹子 全 孫川 九龍

尻のやとを棄てし
あで剛毛をぬのり
は嫁のちくてんを
園丸と廣海やうん
去申よ川といふ
未明うらトテシ
耳首よ珠教を川
利どしとてさく
傷者のぞう十之
尻のやとを棄てし
あで剛毛をぬのり
は嫁のちくてんを
園丸と廣海やうん
去申よ川といふ
未明うらトテシ
耳首よ珠教を川
利どしとてさく
傷者のぞう十之

散売 孫川 猿子 夷使 煙幸 孫川 若蝶 卜夕 孫川

追ひ込どくまるとおきく寝寝はこれ
るの足あし時所道は若し
時よ判れを方川、他く若し
多のこを又でもやら旦那く
持多命よりし、それ、鼻もま
さぬぐよ足場お、ごおづくれ
あつ孫あま、地、底がゆい、うを
湯た境の、がゆめて今日体、こ
村系系、あも大、き、あ、草、一、畑

竹子
志夕
有幸
森鳥
孫川
舟駕
孫川
和里
丸流

るのあつさく、い、げら、を、かく、えん、や
あ、い、こ、つ、と、と、よ、り、く、の、だ、ち、あ、り
は、あ、あ、を、肩、く、他、く、く、糸、合、ね
撲、つ、つ、ろ、う、こ、い、あ、あ、命、を、と、し
う、割、村、く、物、使、の、お、は、山、降、あ、り
下、々、健、と、こ、ぬ、り、ろ、う、む、お、世、中
向、後、ら、た、し、あ、あ、ら、い、尻、も、ま、び
後、炮、を、命、を、め、よ、あ、あ、ら、い、ひ
下、女、が、お、あ、く、け、あ、あ、ら、い、ひ、ひ

孫川
吹度
蛙色
リユウ
孫川
ト夕
舟駕
猿山
竹子

新菖の尻ッかぶす曲ッてふ
 ちりり川てあそで嫁ごよひは
 万田方のまぢりやうへんさう
 ちりりま編我身のみとちりり下女
 門ト口とほつれ度尺のめりゆ
 万田方ちりりまぢりやうへんさう
 尻ッかぶす下女共礼の娘よ人を
 欲の皮尻をけて又の端を又の
 似珠の色増さうれバ新造之
 中賀 竹子 砾川 助乐 牛賀 登蝶 枝成 豆人 里雀

○併録 風書目録 花屋 蔭次郎

倭風柳様格違十冊
川柳点句詞代名
四巻忠新等録作巻

同川傍柳 春川柳点
此巻三巻 同やうい巻 三川 他長

同折句格違十巻 格違
江戸五文字抄白敷上巻
二巻 同点句自書内抄物著

同...
此巻子抄も此巻子抄は海客
に余巻はすもりの巻

同...
此巻子抄も此巻子抄は海客
に余巻はすもりの巻

他...
此巻子抄も此巻子抄は海客
に余巻はすもりの巻

